成蹊會誌

1998.7 No.87

成蹊會誌

1998. 7 No. 87 目次

就任

専務理事に就任して　宇野　重昭……2
学長に就任して　柳井　道夫……3
工学部長に就任して　河田　燕……4
文学部長に就任して　遠藤　宏……5

特別寄稿

世界的危機にある結核問題　島尾　忠男……6
舞踏への勧誘　太刀川瑠璃子……10
甦えるロシア　長屋　晃……12
成蹊夏期大学　北澤　和彦……16
インドの現在・過去・未来　相馬貫一郎……18

随想

裸見合いと芦田内閣　安倍　基雄……22
日本のワイン　越山　育則……23
バレーボール部50年の歩み　西川　泰……25
玩具との人生　井手　篤……27
軽井沢千ヶ滝日記より　横川　晴也……28
五度目の海外単身赴任　三橋信一郎……30
魯山人　塚田　晴可……33

表紙絵の言葉／9　桃花流水／35　新聞記事より／34・52・53
第75回枯林忌／51　「草川信 水彩画展」に先生を偲ぶ／52
物故会員／53　退職挨拶／54　予告／55　文藝春秋より／56
学術・教育助成研究報告／57　成蹊学園の近況／60

同窓のつどい

●第21回桜祭……36
●恩師を囲んで……38
清水護先生米寿の会　木下学級クラス会
田中一行先生を囲む会　宇野ゼミ同窓会
広蹊会総会　柳井先生学長就任祝賀会
船越学級クラス会
●学校・年次会・ゼミOB会のつどい……41
香取先生クラス会　大学卒業30周年
旧高24回懇親ゴルフ会　昭和26年大学入学者の集い
小学校28回合同クラス会　やよい会新睦会
●体育会・文化会OB会……43
成蹊ラガークラブ総会　準硬式野球部OB総会
柔道部七十周年記念式典・祝賀会
蹊声会（有志）箱根合宿
●業界・企業のつどい……45
プレメ同窓会・成蹊医会総会　明治生命成蹊会
魚河岸成蹊会
●地域のつどい……46
シンガポール成蹊会　ロンドン成蹊会
オーストラリア・クイーンズランド成蹊会
北海道成蹊会総会
新宿成蹊会　渋谷成蹊会
長野成蹊会　遠州成蹊会　愛知成蹊会　岐阜成蹊会
岡山成蹊会　三重成蹊会　山口成蹊会

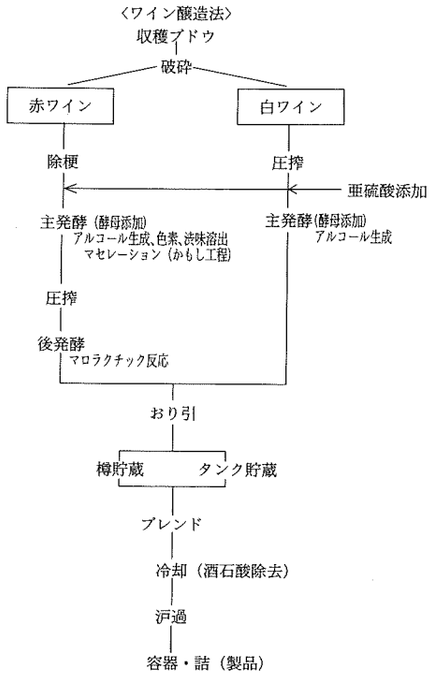
学園史料館資料紹介／66　図書館蔵書紹介／68
アジア太平洋研究センター／69　平成9年度　寄付金芳名録／70
成蹊会事業報告／71　叙勲／72　成蹊会報告／72

表紙の題字は故上條信山先生、絵は高山知也（文51年）

日本のブドウのうち、最も古い甲州ブドウはヨーロッパワインの原料と同じ仲間のビティス・ビニフェラ種で、仏教伝来とともに飛鳥または奈良時代に日本にもたらされたもので、当時の甲斐の国（山梨県）に植えられたとされているが、もともと日本の風土は耐乾性の強い醸造目的のヨーロッパ品種には最適条件とはいえず、甲州ブドウを原料とした現在の国産ワインの品質になるまでには、この悪条件を克服した地道な努力が重ねられた結果である。

昨今は、経済状勢の変化により品揃えと価格帯の拡がりを求めて輸入ワインが市場に多く出まわっているが、日本人の繊細な味覚に合うように作られた国産ワインも多くのファンを獲得している。特に、白ワインは日本古来の甲州種や善光寺種（龍眼）を原料に、また外来種でもシャルドネやセミヨン等日本の地で収穫された原料で、世界市場でも十分に評価される品質のものが作られるまでになった。

ワインの主役は何といってもブドウである。つまりワインの品質はブドウで決まる。ブドウは適地適品種があり、それに合った気候、土壌がある。そしてブドウの栽培、醸造技術を駆使できる人間が組合わさってよいワインができる。ブドウは永年植物であり、よいワインづくりは農産加工の中でも最も時間のかかる息の長い産物である。その点でワインづくりは子育てに似ている。人間の場合、能力に先天的資質に差があるとは思いたくないが、ワインの場合はブドウ原料が先天的資質として重要である。ワインづくりの原点はブドウの栽培にあり、加工工程の醸造やブレンドは、ブドウ原料の良さを活かす技術といってもよい。その点筆者が長年携わって来た醤油づくりとは、同じ醸造でも似て非なるものがある。醤油は加工技術（醸造技術）の産物である。



◇

ワインの醸造法を図示する。ワインづくりは大別すれば白及び赤ワインになる。両者の中間にロゼワインがあるが基本的につくり方は同じであるので省略する。

白ワインも赤ワインもブドウ果汁を亜硫酸の存在下で酵母によりアルコール発酵させることに変りはないが、赤ワインの場合は種皮と種子を主発酵工程で果汁とともに仕込み、アントシアニン系色素とタンニン主体の渋味成分（ポリフェノール）を溶出させることと、後発酵工程で酸味のきついリンゴ酸を乳酸に乳酸菌の力を借りて変換させることが白ワインと異なる。主発酵酵母はワインの場合は当然亜硫酸耐性のあるものであり、醸造の各工程で微妙な品質の差別化が行われる。

◇

昨今は、価格破壊の産物として低価格の国産ワインがワイン市場を席捲している。ワインは食中酒といわれるように料理（食事）なくしてワインは楽しめない。従って手軽に飲めるワインも必要であり、その点低価格ワインが家庭の食卓に気軽に並べられるようになった役割を果した功績は大きい。

ワインはブドウ果汁が原料であり、ワイン以外の酒類と違って加水による調整はできない。ブドウは栽培の手間から考えてもわかるように、農産物の中でも値段の高いものである。その中で品質のよい低価格ワインを実現させた日本のワイン技術者の努力は、大いに評価されてよいものと考えるし、その技術は誇ってもよいと思う。商品のイメージにこだわるだけでなく、その背景にある技術的なことや、その商品の素性をもっと積極的にアピールし、正しく理解してもらうことも大切なことと考える。

ワインは品質面でも、価格面でも非常に拡がりが大きい。ナショナルブランドとして全国的に出廻っている低価格ワインはそれとしてまだ日本のワインは観光みやげの域を出ていない感じが深い。ワインづくりの立場からは世界の高級ワインに伍して、これぞ日本のワインと瞠目されるワインをつくることが究極の目標である。フランスやドイツ等の銘醸地もブドウの適地として最初からあったのではなく、先人達の努力の結実であろう。その意味で、日本にも日本の地に向くワイン醸造に適した品種を育てることが重要である。経済性はともかく、国際分業論だけでは奥の深いワインに夢がない。

日本にもワインの銘醸地（産地）を形成し、食文化と結びついたワインをつくることが大切と考える。

マンズワイン（高・28年）

あの日あの時

バレーボール部50年の歩み

―創部50周年に寄せて―

西川（にしかわ） 泰（たい）

第一回 成蹊大学対甲南大学定期戦（於成蹊）
1954. 9. 10

体育会バレーボール部は今年、創部50周年をむかえる。喜び、苦しみ、悲しみそして汗と涙の50年、それぞれの時代をすごしたOB、OG諸兄姉からその歩みのなかから思い出などを寄せてもらい、時を追いながらまとめてみた。

（政経・32年）

1、創成期

大学発足とともに旧制高校バレーボール部を主体に大学同好会として発足したのが昭和22年、まずは練習コート設置を学校側に申請。設置の許可を得るまで学生部に日参するかたわら、部員の確保に全力を尽くした。

同年7月、前庭（正面を入ってすぐ左側）にコートの設置の認可。（当時は屋外コート）次にネットを張るポールを固定するボックスの製作を当時我々が「大工」と呼んでいた用務員の黒川さんに依頼。ボックスは出来たもののすぐ砂で埋まってしまうため、ポールを立てる度に砂を手でかきだすのが一苦労。このコートは教室から近くて良かったが、表面がヤスリのようなコートであったためレシーブ練習などで手足にスリ傷が絶えなかった。

その後、より良いコートを求めて転々、本館裏側の右側、本館真裏の倉庫の手前、そして最後は理化館北側のコンクリート建物（旧高射砲陣地跡地と言われていた）と学園の塀との間に落ち着いた。このコートは良いコートであったが、唯一悩みの種はコート中央あたりに伸びる一本の桜の枝で、ここでアタック練習をする選手は大変苦労していた。

椙村　敏（政経・27年）

昭和27年春、バレーボール部より練習に参加するようにとの一通の手紙。喜び勇んでコートに出向く。誰もいないコートで待つこと1時間、もう帰ろうかと思った時、校門の方から3人の姿。天谷、山内、小栗の諸先輩。練習開始、4人でパスだけ。これが大学体育会の練習かと驚いた次第。リーグ戦になると、3年、4年の福居、竹内等諸先輩が出てきて試合をするといった具合で1年間。（9人のメンバーを集めるのに一苦労）

2年目には6名、3年目には1名、4年目には5名とそれぞれ高校時代のバレーボール経験者が入部、はじめて運動部らしくなった。この頃、東京西部の五市三多摩大会等に出場、横河電機と優勝を争うほどのチームになった。昭和28年9月、大学時代の思い出を作ろうとマネージャーの沖山と部初めての合宿を計画、小諸懐古園で7日間の夏期合宿。

翌29年、部の記念になるものをということで甲南大学との定期戦を計画、第1回定期戦を9月10日当大学にて開催（因みにこの定期戦はバレーボール界で3番目に古い定期戦になっている由）30年には、甲南定期戦のため部初の関西遠征を行うなど、部創立後数年間の良き思い出である。

渡邊　自營（政経・31年）

2、成熟期

昭和36年以降は、それまでの諸先輩の努力が実を結びかけていた頃で、部員の大半が高校時代にプレーしており金子主将を中心に良くまとまっていた。それにもまして、当時公私共に部

員の相談相手になっていただいた沢柳監督（当時大学助教授）の存在は大きいものがある。練習は時間の許すかぎり見て下さったし、時には自宅で奥様を交え食事付きの麻雀にもつきあっていただいた。残念ながら、後年体調を崩され昭和43年1月28日亡くなられたが、告別式の当日、当時の木村主将はじめ部員達が泣きながら欅並木を歩いていた光景は忘れられない。このような環境の中で部員一同、関東大学リーグ3部の壁を破るべく努力したが結果として3部昇格を果たしたのは、沢柳先生の後を継いだ万田監督の時であった。その後、万田監督の後を継いで監督に就任、自分なりに努力したが私の支えになったのは沢柳先生最後のお見舞いの際の「部のことを頼むよ」と言う言葉であった。

私の監督時代には、3部2位という部の歴史の中での最高位をきわめたが、これは当時コーチをしていただいた伊原氏指導の賜物である。帝人三原の主将を務めた同氏は東京勤務を機にコーチに就任。その指導はとにかく実戦に即して無駄がなく、その上従来の部では考えられない厳しいもので、それまで殴られたこともない部員達がよくビンタをもらっていた。しかし、同コーチのこの気持は部員達にも良く伝わり30年以上経た今日でも当時の部員達は同氏を慕っている。

四ツ橋　由雄（政経・40年）

昭和40年春、7名が卒業、部員集めが新学期スタートの仕事であった。浦野主将のもとで、練習前によく走るようになり、又当時高校ではトップクラスの中大付属高との練習試合も多く組まれ、10セット以上を戦いヘトヘトになったことを思い出す。

昭和41年、中村主将は新チームに対する危機感からか、四ツ橋監督の指導のもと基礎体力のない選手に体力強化の猛練習を課した。又、雨天の際にも必ず練習場所を確保し、雨による練習中止を期待していた選手を否応なく練習に追い込んだ。このような努力の結果、春季リーグ戦では5戦全勝4部優勝、3部昇格を果たした。又、全日本大学選手権にも出場した。昭和42年、木村が主将になり昇格した3部でのプレーに慣れるよう心がけ3部維持が出来るよう努力した。3部と4部のレベルは格段に違い、試合での緊張感、練習内容、練習に取り組む姿勢など大いに勉強になった。宿敵甲南大学に完勝したのもこの年であった。

木村　明彦（政経・44年）

3、女子バレーボール部

野崎　道雄（経・45年）

男子のみであったバレーボール部に女子バレーボール部が結成され、スタートしたのは昭和40年4月、大学の文学部設立と時を同じくする。成蹊高校からの新入生に文学部からの入部希望者等を加え、活動がはじまった。最初は男子と同じ練習に出てボール拾いなどを手伝い、男子の練習後指導してもらうといった状況であった。1年目は6名揃うのがギリギリであった。2年目になると新入生もふえ、学連にも登録、高屋監督のもとで7月からスタート。1シーズン目の昭和41年春は昇格できなかったが、その後はシーズン毎に6部、5部、4部と昇格。昭和43年にはその活動を認められ、学内表彰の栄誉に輝いた。その後、昭和45年3部、昭和46年には2部に昇格。昭和48年春・秋には2部で優勝、再度1部との入替戦に出場するまでになったが、残念ながら実力の差はいかんともしがたく2部残留を余儀なくされた。昭和48年には、体育会で活躍したチームに与えられる最優秀団体賞を受賞。少人数ということもあり男子部員に練習を手伝ってもらったこと、専用のコートがなく小学校の体育館を借りたこと、そして緑川、小島両監督の並々ならぬご指導に対しても心から感謝したい。

小島　澄子（文・45年）
長谷川典子（経・50年）

4、昭和54年～（激動期）

昭和54年春から男子監督を亀村先生より引継ぎ、その春季リーグ戦で5部優勝を果たした。しかも成蹊大学体育館で大勢の応援を得ての優勝だけに強烈な思い出となっている。

この優勝は、あくまでも前監督亀村先生にチーム作りをしていただいたおかげだと深く感謝している。入替戦で東大に勝ち4部昇格も果たせ、OB会で「古巣に戻った気がします」と少々鼻を高くして報告したことを思い出す。この年は、勢いにも乗って甲南戦にも勝つことができ、我が世の春を満喫していた。しかしながら、4部に残留していたのも昭和56年春季リーグ戦までで、埼玉大学との入替戦に負け5部に降格してからというもの負け癖がつき、その後は毎年下部との入替戦を重ね、昭和62年春季リーグはついに12部で戦うことになった。この6年間に天国から地獄を味わう結果となった。

玩具（おもちゃ）との人生

井手（いで）　篤（あつし）

しかし、苦しくとも皆で辛抱し常に全力を尽くす努力の甲斐があり、昭和63年春季リーグの12部優勝昇格を皮切りに部員一同の力によって優勝、昇格を繰り返し、平成7年秋季リーグでは5部まで返り咲くことができた。この7年間に、優勝6回、平成4年秋季リーグでは男女アベック優勝の快挙をもなし遂げた。良い思い出である。

緑川　光生（経・45年）

大学の思い出

このたび成蹊会誌への依頼をうけましたので、つれづれなるままにおもちゃについて私の会社人生をふり返りながら思い出してみました。

わたしは昭和41年政治経済学部を卒業しましたが、成蹊での4年間は大変楽しい学生生活を送ったような感じがします。入学して英語の指導教授の佐久間先生（その後東京水産大学に移り退官された）のクラスに入りましたが、大変結束が固く、32年たった今も佐久間先生やその当時の仲間とはよく集まって、昔を語り合うのが楽しみの一つになっています。

仲間も、サラリーマンや経営者、公務員、弁護士、自営業などまことに多士多彩で、それぞれの人生を歩んでいますが、集まると気のおけない連中ばかりで好きなことを言い合っています。あの当時は経済原論の巽先生、国際政治学の石上先生、憲法の佐藤功先生など懐かしい先生方に教わり、試験では悪戦苦闘させられました。覚えたばかりの麻雀に一時凝って新井先生の会計学の出席数が足りなくなり、卒業間近に追試で何とか及第を取って卒業できた苦い経験があり、今も時々その夢を見て冷や汗をかいていますが、それも今となっては懐かしい思い出になっています。

ところでおもちゃとのつきあいはまことに単純なものでした。大学4年の就職の時に、今も勤務している玩具専門店チェーンの「キデイランド」を受け、入社しました。

あのころは世の中が大変不況で希望していた会社を落ちたことがきっかけでしたが、ゼミでマーケテイングを専攻して流通業に多少興味があったこともあり、この業界はこれから面白くなるのではないかという単純な気持ちから、おもちゃ業界に身をおくことになったわけです。

おもちゃの変遷

玩具産業白書（矢野経済研究所）では97年度の国内の玩具売上規模は約1兆2千億円といわれております。

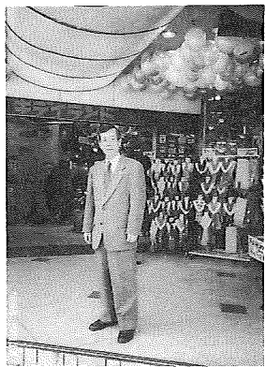
日本の玩具は大変優秀で戦後は輸出が活発で外貨獲得の花形産業と持て囃されました。近年も斬新なアイデア、美しいデザイン、優れた品質で世界をリードしています。

特に国際水準を超える電子技術おもちゃをはじめ、多彩なプラスチックおもちゃ、縫いぐるみ、人形など子供たちの遊び友達として、その多様なニーズに応える見事なおもちゃ文化をかたちづくっています。

一般に小売店の多くでみられる分類は幼児玩具、教育玩具、男児玩具、女児玩具、人形、ホビー、ゲームなどとなっています。昔はおもちゃといえば「子供」を連想し、子供の成長のために必要なものでしたが、今は時代も変わり、対象となるお客様は子供だけでなく老若男女すべてであるといえます。最近は大人や学生が楽しむエレクトロニクスゲームやキャラクター玩具、雑貨玩具が加わり取り扱いの幅が大変広くなってきています。

エレクトロニクス玩具といえば現在任天堂やプレイステーションやセガのテレビゲームや「ポケットモンスター」「たまごっち」が人気商品です。またキャラクター玩具としては「デイズニー」「スヌーピー」、雑貨玩具としては「ハイパーヨーヨー」「スポーン」などが大変人気があります。

昨年爆発的なブームになったバンダイの「たまごっち」は一昨年11月に全国で最初に当社原宿店で販売しましたが、それを手に入れるため5000人の人が店頭に列をなして並び、社会的に大きな話題になりました。あのフィ



東京・渋谷　アリマックスホテル渋谷にて（小・38年卒業）

（着席右から）
㈱浅沼組取締役社長
浅沼　健一
㈱オフィシャルツジ代表取締役・医学博士
辻　和男
常磐大学人間科学部教授
岩井　奉信（ともあき）
㈱原田クロージング代表取締役
原田　健一
有馬石油㈱代表取締役
有馬　清種
㈱風樹社代表取締役
宇佐美　力
（後列右から）

成蹊小学校出身というと、決まって「おぼっちゃま」という言葉が返ってくる。まあ、皆、小学校時代から顔が変わらず、顔が男の「履歴書」になっていないから仕方がないが、苦労を感じさせない顔を作るのが、成蹊のいいところなのかもしれない。

成蹊小学校は三クラスしかなく、ほとんどの生徒が高校までは内部進学していたので、小学校の同級生といっても、大半が高校の同窓生でもある。だから同級生が集まると、話が尽きることがない。

昔と最も変わっていないのが原田で、小学校時代からラグビーをやるスポーツマンだったが、今でもそのままなのが何だか悔しい。

家が医者と薬局をやっていた辻の家では、毎年、彼の誕生日に友達が集まって、辻医院の建物すべてを使って、銀玉ピストルの撃ち合いをやっていた。

ここで最もやんちゃだったのは宇佐美で、自分のクラスの花壇をきれいにするために他の花壇から花を引っこ抜いたのがばれ、担任にこっぴどく殴られたことは、後に色々な尾鰭がついた。

小学校時代から最もおぼっちゃま風だった有馬は、今では、渋谷成蹊会も主宰するなど、同級生の世話役的な存在になっている。

浅沼は、小学校時代はおとなしく、目立たない存在だったが、今では、政治に一家言持つゼネコン経営者になり、Eメールで議論を求めてきたりする。

かく言う岩井の小学校時代は、女の子を追い回す問題児で、中学時代には、出来が悪く、放校寸前までいった。それが大学の教師になったので、大学の信頼性を貶めているようだ。

いずれにせよ、昔の同級生といると、何かホッとする。皆、そう思うのか、最近は、有馬が渋谷で経営するホテルに集まって、昔話に花を咲かせる機会が増えた。この日も同級生交歓の撮影だと言ったはずが、単なる飲み会だと思った者は、普段着でやってきた。

（岩井）

学術・教育助成研究報告

統計及び数理計画法ソフトを用いた大学教育・研究の改革

経済学部　新村秀一

ここ数年、読み・書き・パソコンといって、情報リテラシー教育が大きな話題になっています。小学生から大学生まで、一部を除いて同じスタートラインにあるため、ここ暫くは大学生であっても、PCの入門やワープロといったことを教える必要があります。

しかし、大学の教育と研究における情報技術の役割は、多くの学問がその影響を受け、分かり易く社会に出て役に立つ学問として再編できることにあります。私が研究している統計学（とOR）では、統計ソフトを用いることで①難しい統計が体系的にコンパクトでスリムに理解でき、②実際のデータを分析できる能力を身につける、ことが期待できます。このため、種々の分野のデータを分析し、専門家でない皆さんが間違いなくある一定水準以上の解析ができる解析方法の標準化と、統計ソフトの利用法を研究しています。

成果の一部は、『パソコン楽々統計学』（講談社ブルーバックス）と経済学部論集で報告済みです。

韓国におけるNationalism及び政治文化論

法学部　李　静和

日本を含めアジアの経済状態はますますその深刻さを増しています。インドネシアに続き韓国もIMFの支援とそれにともなう統制を受けざるをえなくなりました。このような状況は朝鮮半島統一論のありかたにも影響を与えてくると思われます。これまでは韓国と北朝鮮の間の経済格差を強調する観点に立脚した統一論が主流でしたが、何百万人もの失業が予想される韓国の経済危機と北朝鮮の食料不足という状況のなかで、いままでの民族主義を理念とした統一論にも、こうした社会・経済的不安を要因とした変容が見られるようになりました。戦後初めての政権交代の背景にも、「IMF時代」がもたらした市民意識の変化が確実に働きました。日本・中国・アメリカとの国際的な関係を踏まえつつ、今後どのような民族統一論が模索されるかがこれからの課題といえるでしょう。

日本語としての国語及びその教育法の研究

中学・高校　石井克己

現在の中・高における国語教育の中心は、文学・論説文の読解・鑑賞である。こちらが示す解釈はあくまでも様々な読みの中の一つの典型であって、絶対的解釈として生徒に押しつけることがないように心してはいる。さりながら、解釈の押しつけを感じ、国語嫌い（＝文章嫌い）の生徒が少なからずいることも確かである。その一方で、「自分の伝えたいことをはっきりと相手に伝えることができない。」と訴える生徒もいる。そこで一つの試みとして、「国語」を「日本語」という一つの言語、又は世界の言語の中の一言語ととらえ、新たな視点で我々の使うこうい言葉を見直していきたい。また、コミュニケーション能力の育成を目的とした活動をこれまでの授業に加えていきたいと考える。具体的には、ディスカッションやディベートを実験的に試み、多くの課題と共にこれまでにない生徒の新しい反応という手答えを得られた。

また数年前よりボランティアとして行っているMIA（武蔵野市国際交流協会）での外国人への日本語レッスンでの経験を通して、学校文法とは異なる視点で、日本語をとらえ直す機会に恵まれた。

今後、こうした事柄を授業にいかに結びつけ、反映させていくか模索していきたいと思っている。

平安末期から鎌倉初期における作歌意識・方法の研究

中学・高校　笹川伸一

いうまでもなく歌語にも消長がある。また、歌語には本意というものがある。

本意というのは、伝統的に形成された、和歌に詠まれる事物の美的本姓のことであり、特に平安末期盛んに行われた歌合などにおいては重要な規範とされたものである。そのため、歌を詠む際には、その本意を正確に理解し、それを適切に表現することが求められたのである。それは、伝統的に形成されたものであるゆえに、急激な変化はありえないのであるが、それでも、本意も時代とともに徐々に変化したり、ヴァリエーションを増やしたりもしているのである。

つまり、歌語の消長やその本意の変遷を見ていくのは、ある